

## すべての企業を支えるITの新たな視点

# UISS (情報システムユーザースキル標準)

UISS (Users' Information Systems Skill Standards) に先行して発表された ITSS (ITスキル標準) は、ITサービス企業の考え方を元に作成されている。多くのユーザー企業は、その内容を反映してか終始傍観者だった。ところが近年、システムの構築・運用のみならず、企画から一括してIT企業にアウトソーシングするケースが多くなり、ユーザー企業側にも「このままではIT戦略を実現できる人材が育たなくなる」という危機感が芽生えてきた。市場での競争を強いられている企業にとっては、ITを駆使した戦略策定は必須だ。

### 高橋秀典

1993年に日本オラクル入社。オラクルマスター制度を確立させ、システム・エンジニア統括・執行役員を経て退社した後、2003年12月にITSSユーザー協会を設立。翌年7月にITSSやUISSを企業で活用するためのコンサルティングを行なうスキルスタンダード研究所 (<http://www.skills.jp/>) を設立。ITSSやUISS策定などIT人材育成に関係する委員会の各種委員を歴任するなど、ITSS、UISSの第1人者として知られる。2006年5月にIPA賞人材育成部門受賞。



### UISS登場の背景

多くのユーザー企業では、「経営層」、「IT部門」、「IT活用部門」それぞれの立場として、ITに関わる役割が明確になっていない。また、IT部門自体もビジネス環境の変化や情報技術の進展に、継続的に対応できる「機能」が体系立って整理されていない状況にある。それにもかかわらず、コスト削減・効率化を目的に、IT部門の機能の多くを情報子会社を含むアウトソーサーに切り出す傾向が強くなっている。そのため、システムの発注者、活用者としての意識が薄れ、本来自らが担うべく役割すらITベンダーなど外部に依存するようになった。その結果、「戦略的なIT」を企画立案・活用するスキルが空洞化してしまっている。

競争がますます激化、グローバル化していく中で、それらを見直しIT部門のあるべき姿を定義し、自社内のIT人材のスキルを高める必要が生じてきた。UISSは、こうしたユーザーの声を背景に生まれたものだ。

### UISS導入のメリット

ITSSはシステム開発プロジェクトを中心に策定されている。しかし、ユーザー企業のIT部門は、システム構築の重要性もさることながら、構

築されたシステムをビジネス部門や顧客にサービスする時点が本当のスタートである。さらに企業自体のメインビジネスを支えるという観点から経営戦略の取り込みも重要な課題である。UISSはこれらの視点から、広い範囲で策定されている。

また、UISSは活用側の観点が色濃く出ており、その結果がキャリアフレームワークの独自性の考え方や、機能役割定義の提供などに現れている。これは、作り手の違いから来ており、ITSSは経済産業省から引き継いだIPA（情報処理推進機構）が維持・管理しているのに対し、UISS策定の中心的な役割を担っているのはJUAS（日本情報システム・ユーザー協会）である。つまり作り手自身が導入する側であり、自らが活用することを前提にしているという特徴がある。ユーザー企業のIT部門は、IT

戦略実現のための人材育成にフォーカスし、自社のメインビジネスをITで支えるということが大きなミッションであるから当然である。

具体的には、UISSは、ユーザー企業のIT部門として必要な機能が「タスク（機能）」と「スキルセット」で定義され、それらを「人材像（役割）」ごとに組み立てる手順を示している。UISSを活用する各企業は、自社の戦略やビジネスモデルを基に、必要なものを選択する方式だ。選択した機能に必要なスキル定義がサブセットとして提供されているので、機能を選択するだけでスキルセットの基本形ができる。UISSとして提供されているものをうまく使いこなすことで、どこのものでもない自社の目的にあった活用環境が構築でき、組織力強化や人材育成、企業戦略の実現が効率的・効果的に行なえるのである。

図1●UISSの活用プロセス

